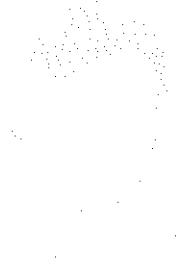


仙 台 司 教 区
『障害の重荷をともに
担える日をめざして』
祈りと分かち合いの集い
報 告 集



カトリック仙台司教区
人権福祉委員会
病者・障害者団体連合会



仙 台 司 教 区
『障害の重荷をともに担える日をめざして』
祈りと分かち合いの集い・報告集
目 次

当日のプログラム、配布資料、参加者数

1.	説 教：仙台教区 佐藤千敬司教	1 頁
	共同祈願	3 頁
2.	基調講演：土井勝吾神父 (カトリック築館教会主任、 仙台教区病者・障害者団体連合会指導司祭)	4 頁
3.	発 題：清水文雄 (カトリック湯本教会信徒)	9 頁
	柳枝米子 (カトリック東仙台教会信徒)	13 頁
	園部英俊 (カトリック元寺小路教会信徒)	15 頁
4.	質疑応答	18 頁
5.	橋本宗明 (社会司教委員会人権福祉委員会秘書)	23 頁
6.	閉会の祈り：小川利秀 (カトリック石巻教会信徒)	24 頁
7.	当日のアンケートから	25 頁
8.	あとがき	

〔当日のプログラム〕 日時：1997年6月1日(日) 午前9時30分～13時00分

会場：カトリック仙台司教区センター（元寺小路教会）

プログラム

午前 9：00 受付開始

9：30 司教ミサ（手話ミサ）

10：40 分かち合い

〔基調講演〕 土井勝吾（築館教会主任司祭）

〔発題〕 ① 清水文雄（湯本教会信徒）

② 榊枝米子（東仙台教会信徒）

③ 園部英俊（元寺小路教会信徒）

〔質疑応答〕

13：00 終了

主催：カトリック仙台司教区 人権福祉委員会

病者・障害者団体連合会

〔配布資料〕

- ① カトリック新聞『'96リレーエッセー 知的障害と精神障害』
- ② 教皇庁国務省『障害のある人とともに生きるすべての人々へ』
- ③ アメリカ合衆国司教団『障害のある人々とともに秘跡をささげるための指針』

〔当日の参加者〕 この他に途中から参加し記名されなかった方が約30人ほどいました。

（仙塩地区）		（県 外）		＜総合計＞	
元寺小路	100	青森	1	166人	
一本杉	10	岩手	4		
東仙台	10	秋田	1		
西仙台	8	福島	11		
疊屋丁	7	東京	1		
北仙台	5	＜小計＞	18人		
八木山	4				
塩 釜	3				
石 巻	1				
＜小 計＞	148人				

1. 説教 佐藤千敬司教

福音朗読 (ルカによる福音 24・13~35)

この〔週の初めの〕日に、二人の弟子が、エルサレムから60スタディオン離れたエマオという村に向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。しかし、二人の目は遮られていて、イエスだと分らなかった。

イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして、立ち止まった。その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起こったことを、あなただけをご存じなかったのですか。」イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。ところが、仲間の婦人たちがわたしたちをおどろかせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、遺体を見つけずに戻ってきました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたというのです。仲間の者が何人か墓へ行って見たのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」そこで、イエスは言われた。

「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。

一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先に行こうとされる様子だった。二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家にはいられた。一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。二人も、道で起こったことや、パンを裂いて下さったときにイエスだと分かった次第を話した。

今日、私たちに与えられた神の言葉は、なんと意味深いものでしょう。

最初の「ノアの洪水」の話、これは、いわば神様の慈しみ、その慈悲深さ、それをはっきりと示しています。しかも、それは契約という形で示されました。神様ご自身が自分でその契約を結び、この神の慈しみは、永遠に跡絶えることがない、ということをお約束して下さったのです。その神様の約束は、今も世の終わりまで続きます。

そして、その神様の慈しみを現実に私たちに示して下さい下さったのが、神の子イエスの派遣であり、その苦しみと十字架、そして復活を通して、それが私たちに目に見える形で示されました。そのイエス・キリストの生涯、その教え、その行い、すべてが神様の慈しみの現われなのです。でも、今日の福音の中にありました「エマオの二人の弟子」の物語、そこに示されていますように、イエス・キリストを本当に認めなければ、その神の慈しみも実現できない。そのキリストを見出し、認め、受け入れることが大事です。イエスと共にありながら、最初は二人の弟子たちの目は閉じられていた、と

いうんです。心の目は。でも、イエスと食事を共にし、イエスがパンを裂き、賛美を捧げてその食事を行なった時、弟子たちの目は開かれた。そして、このイエスこそ、あの婦人たちが言っていた復活したイエスであるということを確認することができたのです。

私たちも、日頃の生活の中でイエスが共におられても、そばにおられるのに気付かないことが多いのです。自分の思い込みとか、望みとか、生活の煩わしさとか、いろんなことに妨げられて、キリストを見い出す、それができないでいる。だから私たちも、キリストの聖体をいただきながら、そのキリストの存在に気付く、そしてキリストの弟子として育てられてゆく、これが大切です。

キリスト者は誰でも言います。キリストのように考え、キリストのように愛して、キリストのように行なう、と。皆、言います。でも、本当にそうしているかどうか、強い反省が求められていることが、この『障害の重荷をともに担える日をめざして』という小さな文書によく示されています。皆さんお読みになったと思いますけれども、キリスト者として、今さら「障害の重荷を担える日をめざして」なんていうのは、ほんとうははずかしいことです。イエス様がなさったことを見、そのように行なおうとしているならば、今さら「障害の重荷を担える日をめざして」なんて言えないはずで

す。まあ、言葉の問題かもしれませんが、「めざして」ということは、「今はそうじゃない」ということが含まれていますね。キリスト者の世界だったら、こんなことは起こりえないはずなのに、今さらながらそれを「めざして」と言わざるを得ない教会の現実、それを私たちは、強く反省しなければならないでしょう。

神様のお恵みは、すべての人を含んでいます。すべての人が、神様の恵みによって創られ、生きている。たまたま何らかの理由で障害を持つ人もいるでしょう。現実の世の中を見ますと、障害を持つ人がたくさんいるにしても、すべての人と比較すれば、まだまだ少数者、と言わなければならないでしょう。そのために世の中は、障害を持たない人を基準にして、すべてが作られ営まれています。人間としての尊さとか、尊厳とか、というよりも効率的な、社会的に役立つか、立たないか、そういった基準で世の中が営まれている。それに対して、私たちキリスト者は「ノー！」と言わなければならないでしょう。

障害を持っていようが、いまいが、すべての人が神の子として、お互いの尊厳を敬い、支えあい、そして助け合っていく、それこそ人間の社会とっていいでしょう。

まあ、今日、この後そのための講演や話し合いが行われる予定になっております。それで、「時間が迫っているからあまり長い説教するな」と言われていますので（聖堂いっぱい笑い）要点だけ述べて、私の話を終わることにします。

心をつつにして祈りましょう。

共同祈願

司祭

主の恵みである大聖年に向かって、心を整え、全教会と共にこの喜びの年をふさわしく迎えることができるように祈りましょう。

先唱

教会の一致と人類の幸福のために働く広い心をお与え下さい。苦しみを通して、ご自分を完全に奉獻されたイエス・キリストに従い苦難にくじけることなく、すべての人に愛の尊さを告げ知らせることができますように。

一同

時は満ちて、神はひとり子を遣わして下さった。

先唱

混乱の最中にある現代世界が、光であるイエス・キリストの教えに照らされて、暴力を排除し、御心に適った新しい世界を築いていくことができますように。

先唱

慈しみ深い父よ、信仰と愛の不足から陥った数々の過ちをお赦しください。愛の秘跡によって、赦しと一致をもたらして下さったイエス・キリストが、私たちの弱さを支え、分裂の痛みを和らげてくださいますように。

先唱

仙台教区の病者・障害者のために祈ります。

慈しみ深い主よ、あなたは弱い立場で苦しみ悩む人々のために御子をこの世に遣わされました。今日、これから催される「障害の重荷をともに担える日をめざして」のセミナーによって、障害を持つ人たちが抱える様々な問題と、心からの叫びとが、障害を持たない人々に率直に伝わり、それによって両者の理解を一層深められ、同じ共同体の一員として、手を携えて宣教活動に積極的に参加してゆくことができますように。

先唱

父なる神さま、今日、私たちは障害をもつ兄弟姉妹たちとともに、感謝のミサに与ることができずことに心から感謝いたします。

私たちは、どれほど障害をもつ方々の喜び、苦しみ、悲しみを共感し、その重荷をともに担っていたでしょうか。この祈りの集いを通して、どうぞ私たちの心の目を開いてください。そして、障害をもつ方々がよりよい市民生活ができるように願い、私たちがともに神の子として神の国の実現のために働くことができますようにお導きください。すべての苦しみを体験された聖母マリアの御取次によってお願いいたします。

司祭

父よ、主イエズス・キリストの祭壇を囲んで一つに集められた神の民が御子の御名によって捧げるこの祈りをお聴き入れください。私たちの主イエズス・キリストによって。

一同

アーメン。

2 基調講演 土井勝吾神父

はじめに

私の持ち時間が20分ですので、昨日原稿を読んでもたら、ただ読むだけで45分かかってしまったもんで、O.H.P.で書き出しますけれども大部分ははしょってまいりますのでよろしく願いいたします。

最初にご挨拶申し上げます。本日みなさんとともに『障害の重荷をともに担える日をめざして』というテーマで、祈りと分かち合いの集いを持つことができましたことを、私はほんとにうれしく思っております。そして、この集いを準備してくださった仙台教区人権福祉委員会のメンバー、それから今日いろいろお手伝いしてくださっている方々に心から感謝いたします。

経過報告

思い返してみますと、13年前1984年小さな手話のグループを始めました。それから87年にカソック仙台、89年6月に第3回力障連総会仙台大会を開催、その後病者・障害者に関していろいろなことがありました。その経験から仙台教区に病者・障害者の集まりを作ったらいいという決断をいたしまして、「病障連」というものを結成いたしました。いろいろなことを今思い出しますけれども、本日、仙台教区でこのような「障害」を考える祈りと分かち合いの集いを開催できましたことは、本当にすばらしいなということを感じ、私たち仙台教区の障害者を中心にしてきた13年間の活動が、今、小さな芽を生えさせたのだなあ、というように思っております。これからもよろしく願いいたします。

「障害は出会いである」

まず第一に、「障害は出会いである」ということをちょっと話していきます。今、経歴とも思い出ともなる話をしました。実はこの「障害は出会いである」という言葉自体変な言葉ですけれども、これは私が親しく付き合っておりました福祉関係の人から、「神父さん、福祉は出会いだよ」という話を聞かされまして、私も今話したようにいろいろ付き合っていて、「障害」との関わりを持ってまいりまして、「ああ、障害も出会いだなあ」という確信、そういう気持ちがあるんです。それで、その方の言葉を使わせていただきまして、「障害は出会いだなあ」という話をまずさせていただきます。

ほんとに私はこの出会いで「障害」とは何であるかということをいろいろ教えられました。「障害」の問題は第一に体験です。ですからみなさん、ぜひ自分のできる範囲で小さなボランティアでもいいし、グループ活動でもいいし、独善的な活動でも何でもいいですから、まず第一に「出会い」を

始めてください。そうすることによって、「障害」というものが何であるかということが分かる出発点になります。ですからキーワード（標語）として「障害は出会いである」と心に留めてください。出会って触れて、触れ合って、そこからの体験によって「障害」が何であるか、ということが分かるような気がします。できることならば、各小教区でお互いに助け合うグループなどをつくって、助け合うことを発見し交わりをしていただけたら幸いです。言葉としていい言葉か、適切な言葉であるか分かりませんが、「障害は出会いである」というこの言葉をひとつ感じてください。単に本だけ、講話だけ、勉強だけ、関心だけでは障害の現実には近づけません。

「障害についての固定的な考えを捨ててください」

「障害についての固定的な考えを捨ててください」ということについて、みなさんにお話しします。

ある時テレビを見ていましたら、有名な悪役の、敵役（カタキヤク）というんですか、俳優の話が出てまいりました。

「『悪』という字を見てください」と。これ、「悪」（アク）と読んでいいのか、「悪」（ワル）と読んでいいのかわからない。「悪い」という字を見てください。「悪い」という字の中には「心」があるでしょ。「善」には「口（クチ）」がついているだけだ、という話をしたんですね。

「なるほどな」と。

「善」という言葉は、あの上の方は「羊」（ヒツジ）になっていますね。「羊」という字は「おめでたい」とか、という意味があるんですけどね。そして、「善」は「おめでたい」に「口」がついています。「美しい」とか「おめでたい」というのは“口（クチ）”だけのことかな、と思うことがあるんです。というのは、「不幸」というものをいろいろ見てまいりますと、「不幸」というのは一つとして同じパターンがないんです、いろんなパターンがある。けどもね、「幸」というのは十把からげて「幸」なんです。ですからあんまりおもしろいことないですよ。ただ嬉しい、と思うけどね。後には妬みと恨みしか残らない。（笑い）私、根性が悪いから申し訳ありませんね。で、よく障害のある人たちとお付き合いしていて、こんな最悪の中でどうしてこんなに明るく生きられるのかなという、やはりね、この苦しいとか「悪」とかいう中には、一人一人その生活の苦勞の中に

「心」が通うことが沢山あるんです。ですから、「悪」には「心」がある、この言葉に心が引き込まれました。

「『悪（アク）』には、『悪（ワル）い』ということには、“心”があるんですよ。しかし『善い』とか『美しい』とかいうのは“口（クチ）”だけのことなんですよ」と思うんです。

これは。私は「障害」のことを考えるとき、この言葉がピーンと来るんですよ。これは倫理的にどうかこうかということでの意味じゃないですよ、心にすうっと来る何かがあるんです。私は「障害」の問題を考えるとまさにこの「悪（ワル）い」とか「悪（アク）」には一人一人の“心”があって、それが何か豊かにしているものを感じるんです。このことが「障害」を考える時の感性としています。そうすると、心が豊かになると思っております。

「障害のある人、障害のない人」

「障害のある人、障害のない人」について話します。

この冊子の中では「障害者」とか「健常者」という一般名詞を使っていません。このことで、私の考えている「健常者」とは一体なんだろうな？「健常者」。私は、酒を飲み過ぎて糖尿です。18歳の時から一升酒を喰らってましたから糖尿になりました。それから慢性の腰痛で4ヶ月引っ張られましてね、手術するつもりでいました。そんなとき、ほんとに「障害者」でしたね。それ以来何年かに一回ずつ必ず起こってきます。そうすると、病気をするというにはある意味では障害をもつということですから、「健常者」というのは一体何なのかということを考えてみました。他の発題者が具体例を話すので、私は信仰的なことを話させていただきます。

『創世記』の中で2章の7節にでてくるとおもいますけれど、そこに「主なる神は土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり」と書いてあり、さらに創世記3章19節で「塵にすぎないお前は塵に戻る」と書いてあるのをみなさんにご存じでしょ。私はこの塵、泥という言葉には、心が惹かれます。神さまはなぜか泥で私たちを造りたかったんです。泥というのはどうも壊れやすくて、なんですかね、傷つきやすくて、割れやすくて、不完全。ですから、人間というのは本来そういうものだろう。私たちは「健常者」などといわれていますけれども、聖書の中ではこの言葉は勿論ありませんが、あまり聖書的ではないのだなあ、と思っているんです。神さまは、こういうことを言うときちょっと語弊がありますけれどもね、もともと私たち人間というものを病気になるように、壊れるように、障害があるようにお造りになっているような気がしてならないのです。

私は今、「障害」には二種あると感じています。一つは、具体的に心身の機能が損傷して起こる「障害」。この「障害」は誰かが助けてくれたり、機械で補うことで何とかするんです。二つ目は、ある人たちがある人たちを排除したり、無視したり、差別したりして、そういうことから生ずる障壁ともいいますが、バリアというか、そういう所で生ずる「障害」というのがあるんです。そして、私はこれが「障害」の本質であり、障害のほんとの姿だと思います。だから、ある人がある人を差別したり、助けなかったりする、そういうところから出てくる「障害」というのが「障害」の本質かなあ、と思っているんです。雑誌によるとイタリアでは特殊学級がなく、統合教育なそうです。聖書の中では、「健常者」という言葉も「障害者」という言葉もありません、差別を示す言葉はふさわしくないんです。「障害のある人、今、ない人」具体的な姿が見えたらえ方がすばらしいと思います。野生の世界には「障害」はあるのだろうか。

「イエスの特別な愛の対象になったのは徴税人・異邦人・病人・障害者である」

次に、マタイ11章の2節から6節、またルカ18章のお話をいたします。どういうところかというね、ヨハネの弟子がイエスさまに向かって、「来るべきかたは、あなたでしょうか」と問うところなんです。その時に、「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人には福音が告げ知らされている。私につまずかない人は幸いである」という御言葉があるんです。ルカ4章21節では「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と書かれているんです。これはね、旧約の時代

に神さまはイスラエルと律法をもって契約し、王様を与え、そして人間が幸せになるようにと考えたんです。しかし、幸せにならなかったんです。ますます争いが起き、他者を差別し、特権階級が生じ、不和と不信、支配と搾取が満ち、幸せが遠くなりました。人は神に祝福されておりますが、利己心と高慢はすべてを不幸にします。神はイエスを派遣しました。イエスさまは、貧しい人、差別された人、弱い人に福音を告げ知らせました。そういうところに福音が現れているんだ、ということなんです。これを徐々に話していきましょう。

イエスの宣教なされたことは、財産が豊かで、金品が豊かで、権力があって、学問があって、健康で家庭に恵まれて、という姿にだけ幸福があるのではないということです。人間は、偉くなりますと自惚れて、他者を見下すようになって支配する。そして、その中に争いが起きてしまう。そこには平和と一致というものはなくなってしまいます。神さまは人間を最初から泥でお造りになっていますから、壊れやすく、傷つきやすいものなんです。みなさん、あの人間の最初の罪の中で、カインとアベルの話が出てきますね。要するに、カインはどうしたかという、自分が無視されたということに怒りを持つことになったわけですね。これは差別なんです。差別に対する大きな怒りが出てくるんです。世の中が豊かになればなるほど差別が多くなるんです。豊かとはどういうことなのか、同時に貧しさがあるということなんです。豊かっていうことは、争いと悲しみと苦しみが出てくる貧しさがあるということです。

イエスは、まさにイザヤの預言じゃないけれども、この苦しい人々の中に神の到来と、愛と恵みが実現する福音が告げ知らされている、この福音宣教の現実こそすばらしい世の中のはじまりになるんだよ、ということ言われているんです。ですから、キリストの教会はこの弱い人々の中に、そうでない人がお互いに助け合って統合する世界にこそ、神の幸（しあわせ）というものが生ずる、それがキリストの使命である、ということ洗者ヨハネの弟子たちに答えたわけですね。ですからね、この頃、弱い人・障害者のために何かしましょう、というような話が突然出てきたように思うでしょうけれども、これはキリストの救いの歴史の中で神が予定された新約の姿なんです。ですからね、私は単に倫理的にキリスト者がなすべき徳目として、弱い人を助けなさい、というのではない。この世が幸いになるためには、まさに貧しい者に福音が述べ伝えられているという姿こそ教会のあるべき姿なんです。そのことを一つ考えていただきたい。

「障害の意味」・「障害の神学」

次に、「障害の意味」・「障害の神学」について考えてみます。

私は聖書学者でもなんでもありませんので、私の聖書の読み方は、なんといいますか、センスで、私の感じた心で話していますからね、「土井勝吾さん、あの聖書解釈は独善的だな」と言われても、もともと私ははっきり言って独善的な人間ですから（笑い）、自分が聖書で感じた以外のことは喋りませんから、ご了承ください。でも、あの、勉強しましたから（会場大笑い）。

「障害の意味」ということについて考えてみたいと思います。この冊子にあるヨハネ9章2節、「この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか」というお話ね、みなさん、ご存じでしょ。「本人ですか。それとも、両親ですか。」とイエスに尋ねた時、イエスはヨハネ9章

3節、「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」と答えます。

最初に、創世記の話で神は障害のある世界を認められているのじゃないかと言いました。私はさっきも言ったように、よく「病気で死ぬ」と言うんですけども、病気で死ぬ人はいないんですよ。人だから死んでしまっただけの話なんです。病気だから死ぬんじゃない、と思っております。常に思うけれどね、この死とか、苦勞とか、病気だとかということは、人だから起こるんであり、決して何か特別な原因で起こるわけではないんです。私たちは罪と言うけれども、原罪というのは誰かが倫理的に罪を犯したということではないんです。人間の存在の根本の姿を言い表す言葉であると思っております。神はもともと泥で私たちを造られました。そして、私たちのところには、必ず人を恨むような、人を見下げ見くびるような心が必ずあるんです。これは偉くなれば偉くなるほど強くなるんです。だから偉くなっている人は、お互いに気をつけましょう（会場大笑い）。偉くなった人はほんとに知らないうちに自惚れてしまうんです。私もその典型でございますので、私がそういうことをやったら、「頭禿らかして、チンチクリンがなに言うんだ」というようなお叱りとご注意を頂ければ、私は幸いに思っております。

イエスはある意味で障害のある世界というものを容認しているんです。じゃあなぜそうしているのかな、と私は考えるんです。さっきの話の続きじゃありませんけれども、私たちはどうしても自分には棘がないと驕るんです。そしてその弱い人がいることによって、私たちは自分の棘と自分の驕りを感じさせてもらうんです。そして、そういう人々と共に生きることによって、本来的なほんとの喜びを感じることができるんです。そのためにまさにどういうわけか分かりませんが、この世の中に「障害」というものがあるわけです。そして、それは現実に辛いことですが、それは神の栄光を現すため、そうなんです、弱い人も強い人も共に助け合っている世界、そういう現実が現れることこそが神の業であって神の栄光の業なんです。人を批判し、少しでも自分が偉いと思うような世界の中には争いと妬みと辛さしかないんです。弱い者同士がそうでない者が助け合う時、そこにありがたいものが出てくる。

「障害のある人とのコミュニケーション」

最後に、「障害のある人とのコミュニケーション」についてです。

みなさんね。聞こえない人に聞こえるように、見えない人に見えるように、歩けない人に歩けるようにということは、できないでしょ。そうすると、そのコミュニケーションの手段は、それができる人がするのが当然なんです。当たり前なんです。人が助け合って生きるということはそういうことなんです。ですから、教会に障害者用のお手洗いがあったり、スロープがあたりするのは当然なことなんです。それをつけてやるという話は大間違いなんです。 「障害のある人とのコミュニケーション」を考える時、私は幼稚園の園長でもあります、それから赤ちゃんを育てるのが上手い人です（会場大笑い）。ただし、私の子供は一人もいませんでした（会場大笑い）。私は「障害のある人とのコミュニケーション」の中でいつも赤ちゃんのことを考えるんです。障害のある人が赤ちゃんだとか赤ちゃんのようだというのではないですよ。赤ちゃんは全部親に頼る。食べることから排泄すること、着る

ことからなにからなにまで。しかし、皆さん、私は、赤ちゃんというのは一日見ていても飽きないんです、ミルクを飲ませてあげて、ゲップを出させてね、おしめの取り替えも上手なんです。どうぞ子供を育てきれないときは私のところに（会場大笑い）。赤ちゃんは物理的に手間のかかることばかりです。でも、いろんな表情と仕草で楽しみと喜びを与えてくれます、弁解一言、障害のある人はそんなに手間がかかりません。障害のある人とのコミュニケーションでも、この人のためにしてやるのか、助けるとかではなく、一緒にいて楽しいと感ずることです。赤ちゃんがニコッと笑ってくれるのと同じように、「どうもありがとう」と言ってくれたり、「あっ、この人と心が一つになっている」と感ずる時に、それがお世話するとか何とかじゃなくて、すばらしい喜びとして感ずる。みなさんも障害のある人とのコミュニケーションの中でそういう気持ちになれるようなお付き合いをしていただきたいと思います。この心の交わりが障害のある人との交わりの中でいちばん大切なことだろうと思っております。私もそういう気持ちでお付き合いいただいています。最初に言ったように「障害は体験だ」という話の中で、障害のある人とのコミュニケーションを摺り合わせて考えてください。

私の時間、ちょうど20分、だいたいピタリと終わりました。

どうもご静聴ありがとうございました。

3. 発題 清水文雄さん

今日、私がこの壇上に立つはずではなかったんですが、本来ですと、石巻教会の小川さんという方が、やはり視覚障害者の方なんですけど、ここに上がってお話をするはずだったのです。ところが、小川さん、急に倒れられまして入院され、やむなく私がここに立つような状態になったわけでございます。

幸い、小川さんの病状も回復いたしまして、つい最近退院され、本日、ここにお見えになっているということでございます。「無理はするな！」と、言ったんですが、今日は、是非とも来たいということで、この集いに見えております。まだ退院間近ですから、改めて、無理はなさらないようお願いいたします。

さて、「視覚障害者」、一言で「視覚障害者」といいますが、「視覚」というのは、`見る`感覚、ですね。`見る`、ということ、私は、残念ながら、生後10日目で失明をいたしましたので、何も見たことはないのですが、この見る感覚の中の`視力`、`視力`というのは`見る力`、ですね。これが`0`、（ゼロ）になっている私のような状態、これを「視力障害」と呼んでおります。ですから、この私のような人が「視力障害者」と呼ばれているわけですが、一般にわかり易い言葉で「盲人」、これだったら皆さんわかると思います。

今日は、この「盲人」という言葉をつかって、これからお話を進めて参りたいと思います。

この「見る」ということは、先程申しましたように、私は見たことはないのですが、如何に素晴らしいことであるか、昔からこれを`重み`、で表わしているのですね。

「胴百貫にして、目千貫の重みなり」……。現在のメートル法でなく、尺貫法の時代の譬ですけども、それだけ、「目」というものはすばらしいんですね。だから、私も「一回見てみたいな

あ！」なんて、今は考えてませんよ。今は、別に見えなくたってどうということないんですが、目が見えないということになりますと、社会生活の中でいろいろな問題が出てくるんです。

ある時、ボランティアと私達盲人の合同会議が、いわき市であった時のお話をちょっとしてみたいと思います。

会議が終わりまして、その中の何かの説明がわかり易いように、ビデオを使って説明をするということで、皆さんは、ビデオが見えるように座ってほしいのです。ところが、そこに盲人が5～6人（わたしも含めて）おりまして、ビデオを見ていた最中に、一人の女性の方……この方、勇気のある方で、後でできたのですが、福祉大学を卒業された、その時、弱冠23歳……が、ずっと立ち上がった気配が私に感じられたんです。すると、

いきなり「盲人の方、私と一緒に出ましょうよ！」と豪快に一言いわれました。

皆でビデオ見ているのに、どうしてなんだろう？その時、これはどういう訳か、私には全くわからなかったもので、あっけにとられ、「どうしてですか？」と尋ねたら、「盲人の人達をどうしてビデオの後ろに並ばせなければならぬのですか？、どうして皆と一緒にビデオを見る態勢は、できなかったのですか？！」

主催者で、椅子を並べた人達は、そこでびっくりしましてね、「私達はいいですよ、かまいませんよ、どうせ見えないんですから」と言ったら、その人は、「だからいけないんです」「社会は『見える、とか『見えない、とかでない。やっぱり皆と一緒に今、ビデオを見てるという状態で、盲人も皆の仲間に入って、見える、見えないは別です』とその方は盛んに言っていました。 ああ、なるほどなあと、私、後で感じたのでした。

常に、『見る、という感覚が失われておりますと、全盲の家庭の場合（奥さんも全盲、旦那さんも全盲）、回覧板が来たり、手紙が来た時など、普通の字ですとわかりません。ですから、親戚の人が来るなり、ヘルパーが来るなり、そういう時まで、それをじっと保管しておかなければならぬ。その時に、理解のある近所の方に、いろいろお手伝いしていただければいいんですけど、やはり、三度に一度は申し訳ないからと、遠慮する場面があるんでね。ですから、そういう生活実態の中で、近所の方々のご協力によって実生活を送っているというのが、現状でございます。

盲人の生活実態につきましては、もっと詳しくお話ししたいのですが、時間の関係上省略いたします。

次に職業の問題についてお話ししてみたいと思います。

身体障害者の雇用の問題では、企業で身体障害者を雇ってくれるところは、なかなかないのです。よほど理解のある企業でないと雇ってくれないのですが、多少、今は、その理解がされているという話しも聞いてはおります。

何せ、国でもっていろいろ雇用の問題は出ているのですが、なかなか達成できないのが現状であります。

ある聾の、いわゆる耳の聞こえない方ですね。聾者と呼んでおりますが、ある聾者のことを例にとってお話ししてみます。

学校を卒業して、いろいろ就職口を当たったんでありますが、なかなかない。ようやく、あるクリ

ーニング店で働けるようになったので、この人は希望に胸をふくらませて毎日、毎日通っていたわけです。

そうしましたら、ある時、一人の同僚が、この青年に用事がある、でも聞こえないので、側にあった石、を拾ってこの青年の背中にぶっつけたらしいんですよ。そしたら、自動的に振り向きますね。そこで青年は、側のメモ用紙をとって、「私は犬ではありません。話をするなら、側に来て言ってください」と、書いてその人に渡したそうです。するとその同僚は、返事を書いて青年に渡しました。それに何と書いてあったかという、「犬でなければ、猫なのか」と。この青年は、非常に大ショックを受け、「私は犬でも猫でもありません」と、遺書を残して自殺をしてしまいました。

さらに、今度は、盲人の職業について話しますとわれわれ盲人の職業というのは、昔から、按摩、針灸、マッサージが主だったのです。

そんな関係で、盲人を見ると、今はそういう言葉は聞かれなくなりましたが、「あんまさん」という言葉が呼び名でした。一部では、未だ言っているかもしれません。別に、見えない人が皆、按摩をやっているわけではないのですが、「あんまさん」「あんまさん」、見えない人を見ると「あんまさん」と言ったのです。昔。

私達が盲学校に行ってる時も、巷の子ども達に、親が「あんまさん」と言っているもので、「あんまさん」「あんまさん」と言われました。

「あんま、あんま、あんまの子供は、一銭五厘、などと、馬鹿にされたものです。

どういうわけか、私達と同じ位の子どもが、私達を見ると、石をぶっつけるんですよ。大部、私も石をぶっつけられたことがありました。

そういう変遷を経て来て、今では「あんまさん」という言葉は、私の周囲では耳にしなくなりました。

また、盲人の場合ですと、戯れ歌、譬えに利用される時代があったんですね。近代的なことと言えば、あの「座頭市」ですね。勝新太郎の。見た人の言うには、「あれは大変すばらしい！」っていうんですけど……。戯れ歌の中に「あんまさんでも惚れれば可愛い 肩の凝るたび思いだす」…肩凝った時しか、思い出してくれない。そういう強烈なことも言われ、また、謎かけの中で、「あんまさんの芝居見、とかけて、何と解く？」「秋の花畑、と解く」うまく解きましたね。「その心はキク、菊一【聞く】一ばかり」というんです。

そういう風に、盲人は、社会生活上に於いていろいろ差別されておりました。現在は、差別語が問題になりまして、例えば、差別語といいますと、「めくら」「びっこ」「あっぱ」とか、そういう差別語は使っちゃいけないということで、法律の中でも今は使われていないんですね。

「耳の不自由な人」、「目の不自由な人」あるいは「耳の聞こえない人」、「目の見えない人」というように変わって来たのであります。

しかしね、皆さん、皆の前で差別語を使わないようにとか言いますけれども、實際上、差別語って、それ程意識する必要はないと思うんですね。これは私の考えですけど、例えば、ここで良い言葉

を使っていて、社会の中で「今日は『メクラ』の人達と、『オシ』の人達と話し合いやったんだ」なんて言ったら何んにもならないんですよ。ですからそんなに重要視するものでもない。

要するに、〈心の問題〉でございます。やっぱり心が一番大切なものであって、差別語とかいうものは、心さえ通っていけば、自然となくなってくるものでございます。ですから、この点は余りに留めないで、一応そういう差別語というものがあるのだということを、理解していただければ幸いです。

それから、ある特養老人ホームでのことをお話しをしてみたいと思います。

これは、私の教会のある人が、現にそのホームに行って介助の仕事をちょっと手伝った時に、そういうことがあるということがわかったんであります。

老人に、朝御飯を食べさせているところへ行ったんです。そうしたところが、これは事実です。ホームの看護婦っていうんでしょうか、寮母さんっていうのでしょうか、薬の袋からカプセルの薬、粉の薬をバラバラにして、お粥の中に混ぜてそれを食べさせようとしていた。「この人はね、御飯一口か二口しか食べないんですよ」と言いながら、薬を混ぜたお粥を食べさせていたそうです。やっぱり、その時も一口か、二口で「いらぬ」って言ったそうです。

たまたま、お昼まで手伝っていたので、お昼ご飯の時、寮母さんから「今朝と同じ、薬を混ぜて食べさせてください」と頼まれたそうです。

ご飯の中に薬を混ぜたもの、食べられますか?!……実際問題として。その人は腹が立って、煮えくりかえていたそうですが、その場では何も言わなかったそうです。

そして、その寝た切り老人とお話しを交しながら「ご飯食べますか?」と尋ねると、「いいえ、もういいです」と返事が返りましたが、「変なもの混ぜないから」、「ほんとうのご飯をあげるから」って言ったら、ニコニコと笑ったそうです。一口お粥を口にして、「おいしい!」って言ったそうです。そして、その人が食べさせたら、きれいに食べたんですって。

寮母さんに報告したら、びっくりして、「あの人、今までご飯なんか食べないから薬も混ぜて食べさせることになったんですけど。どうして今日は食べたんでしょうね」って言ったそうです。

その人は、寮母さんには何も言わなかったそうですが、所長さんの所に行って、食事の時の様子をお話ししたそうです。「あなただって、もし寝た切りになった時、薬を混ぜたご飯食べられますか?」 そうしたら、その所長さんは、「それは申し訳ないんだけど、実際、職員の手が足りなくて、忙しい」。「忙しいなんてとんでもない! 忙しければ、何やってもよいのですか?」 「今後、気をつけます」と所長さんは、いわれて、その人は引き下がってきたそうです。

一体、『真のボランティア』とは何か? ここでもう一度考えてみたいと思います。

「ボランティアの10カ条」といって、いろんなことが記入されたものがあるのですが、私がいつも言っていることは、『ボランティアとは、その人と友達になること』。それが本当のボランティアではないでしょうか。友達になっていけば、その人が今、何を望んでいるか、どうして欲しいかわかるわけですよ。

最後に、教会共同体としては如何にあるべきか？

これは、障害者がよく言う言葉なのですが、「私たちは、『哀れみや同情の対象物、ではない！』。自然的な感情として、車椅子の人を見た時、目の見えない人と会った時、『可愛想だなあ、』『気の毒だなあ、』と思うのが自然なんです。ですから、私は、決して「同情や哀れみの対象物ではない」などとは申しません。大いに哀れんでいただきたいと思います。ですけど、キリスト者は、私を含めて、そこからもう一步進んで考えていただきたい、

それは、『哀れみ、』や『同情、』の中から「理解」をしていただきたい、ということ。車椅子なら、車椅子の人への理解、盲人なら盲人への理解。理解をした後は、「愛」が自然と生まれます。

どうぞ皆様、今日の集いの中でこのことをお考えいただいて、障害者を見た時には、『同情、』や『哀れみ、』の中から理解をし、愛の心を育てていっていただきたい。このように考えるわけでございます。

ご静聴感謝いたします。ありがとうございました。

発 題 榊枝米子さん

私は固いことは苦手で、お茶を飲みながらざっくばらんにふれあうことが大好きです。

私が立てなくなって、車椅子の生活を始めて55年になります。

このような高い場所に立つと、恐怖感というより何だか雄大な気分になって、何を話したらよいか忘れてしまいそうです。

皆さんは、障害者同士が結婚して毎日どのような生活をしているのだろうか、とお考えだろうと思います。

私たち夫婦に子供はいません。市営の車椅子専用住宅に住んでいます。主人は筋ジストロフィー患者で、私が身の回り一切の世話をし、自動車の運転もしています。

今日もそのため30分遅刻してしまいました。

毎日の生活は皆さんと変わりありません。炊事、洗濯、買い物、おつかいなど、すべて自分でしています。

皆さんと違って大変なことは、何をするにもとにかく時間がかかることです。近頃、歳のせいだとは言いたくないし、自分で思ってもいませんが、皆さんに手伝ってもらって、毎日を頑張っています。

「今日があるから楽しく、明日が来るから嬉しい」と、毎日、毎日、過ぎるのが早くて、「一日が48時間もあればいいなあ」と思って毎日を過ごしています。

皆さんは、車椅子、松葉杖その他いろんな障害者を見受けられるでしょう。そんな時、誰もが同じように、「体が不自由なことは大変だろうなあ」と思うでしょう。

そんな場に居合わせた時は、ごく自然に声を掛けて下さい。それは、私たち障害者にとって一番嬉しいことで、ほっとするのです。私たちも声をかけられたら何をしてほしいか、きちんとお願いすることが大事ではないでしょうか。

都合により、障害によっては、お断りすることがあるかもしれませんが、その時はがっかりしないで、「それでは、気を付けて頑張ってくださいね。」と言って下さい。

障害者の方も、決して無理しないで「手を貸してください」と声をかけてお願いすることです。お互いにふれあうことが大事ではないでしょうか。

障害のある人、ない人と決めつけないで、同じ人間としてコミュニケーションを持ち、共同体意識を大切にしようではありませんか。

皆さんは、この本をお読みでしょうが、大変良いことばかりがいっぱい書いてあります。考えさせることがいっぱいあります。この中の7頁、20頁、21頁に考えさせるところがありました。

今の日本では、声を大にして叫んで生きていかなければなりません。共同体の三文字をしっかりと意識して歩いていきましょう。

実際にあった話をしてみます。

お店で買い物済ませて車に戻った時、2～3メートル離れて40～50歳位の男性が、腕組みして立っていた。私が荷物と車椅子を車に積み込んで運転席に乗り込み、発車しようとした時、くだんの男性が車のすぐ傍に立って、じっと見ていました。

私たち障害者は、見せ物ではありません。感じの悪い（不愉快な）一日でした。

その人は、どうやって積むのかな、どうやって乗るのかな、と感心して見ていたのだと思います。そのような場合、私たち、見られるのが嫌とは言いませんが、「大変ですね」とか「ご苦労さん」と、ほんのちょっとした声をかけられることで、私たちは非常に気持ちが楽になるのです。この些細なほんのちょっとしたことで、ふれ合いができるのです。

だから皆さん、「声かけ」して下さい。勇気を出して「声かけ」して下さい。

もう一つ、最近多くなった「自動ドア」です。私たちはボンと自動ドアの傍に行けないので開くまで待っていると、後ろから来て、前に突っ込んでくるんです。

一番怖いのは、子供さん連れです。子供さんが無理やり前に出ようとする、車椅子のキャスター（小さい前輪）に足をぶっついたり踏んだりすると、よく怪我をすることがあるのです。それが怖いので、私はいつも「すみません」、「すみません」と言って出入りするのです。

お店に買い物に行った時など、奥さんたちがしゅっちゅうぶっつかってきますが、何時でも知らんぷりです。お互い知らない同士でも「すみません」、「大丈夫？」とかの「声かけ」が、愛情ある世の中の一番だと思えます。

私は長年このような車椅子の生活を続けてきましたが、それらを乗り越えていかなければ生きていけないので、行く先々で皆さんに手を借りています。この会場の皆さんにも「ちょっと手を貸して下

さい」と言って、借りたかもしれない、借りるかもしれません。

私たちは、座った状態、皆さんは立った状態で、顔も知らないまま、その場で声だけ交して去るのです。帰宅後、「今日、手を貸してくれた方、どんな方だったかな、眼鏡かけてたかな?」、よくわからないのです。下から見上げるのは、失礼になると思うので、いつも下を向いたままなので顔はわかりません。

顔を合わせて声をかけたい時は、ちょっと腰を下げて車椅子に手をかけて、「何かお手伝いすることありませんか?」と、声をかけていただければ、私たちには本当に何よりの励みとなり、力になることなのです。

限られた時間で、話足りないこともあり、おわかりいただけたかどうか。

私の車は足が使えないため、足を使用するところは両手で扱うように作られた障害者用特別仕様です。ご覧になりたい方は、どうぞ表にとめてありますので、ご覧ください。先ほどお話ししたように黙って、腕組みして立って見たりなどなさらないように。

主人は、筋ジストロフィーの全国患者代表の理事をやっている関係で、10年程前になりますが、「どうしても行ってくれ」ということで、主人の退職金をあて、私の運転で主人を乗せて約1ヵ月かけて、長崎、宮崎から全国を回りました。その折、全国の国立療養所を訪ねましたが、先ず裏口から入って患者さんに会って、不自由なこと、困っていることなど聞いてから、看護婦さん、先生や薬局の方などとともいろいろお話しをする、ということをして回ってきました。

発 題 園部英俊さん

障害を持った方々との関わり

私は8年前にプロテスタント教会で洗礼を受け、一昨年にこの元寺小路教会にまいりました。カトリックに移って間もないのですが、昨年「人権福祉委員会」のメンバーとして働かせていただいております。私と障害を持った方々との関わりは、三つに分けて考えられます。

一つは仕事を通してということです。私は嘗て歯科医師として、国立の病院や仙台市の「障害者歯科診療所」でさまざまな障害を持つ人々の診療や検診に従事させていただきました。特に、この診療所では脳性麻痺ですとか知的障害・自閉症などの子供さんやそのお母さん方とさまざまな出会いを持つことができました。もう一つは、現在保健所と福祉事務所に勤務している、ということです。こちらでは、難病、それから精神保健・障害福祉・児童福祉の業務に携わっております。

それから次に二番目には、精神障害を持つ家族を持っているという立場が一つあります。

三番目には、自分自身の問題として、障害といえるかどうかはわかりませんが、内臓疾患を持っており、それを「内部障害」と考えれば、自分自身もそういうことに関わりがあるかな、と

思っております。

こうした立場から、『障害の重荷をともに担える日をめざして』思うことを少し述べさせていただきます。

「見えない障害」

特に「見えない障害」ということで話したいと思います。「見える障害」の場合、私たちは、目が不自由な人といいますと白い杖・点字、あるいは耳が不自由な人といいますと手話、また足が不自由な人といいますと車椅子というふうに、具体的なことを連想します。そして、こうした人々に対しては、何かできることがあれば手を貸して上げようとする人は最近かなり多くなってきていると思います。また、実際に具体的な行動に移せなくても、そういう方々の存在というのは受け止めやすいのではないかと思います。それで、この「目に見えない障害」ということですが、今述べましたような「見える障害」に対して、内部障害や精神障害・知的障害を持つ人については、外から見えにくい、自分からは言えない、また言いたくないというようなことから、そのような障害を持つ人の存在を心に留めることが難しいのではないかと、思うわけです。

内部障害

まず内部障害の問題です。だいたい先ほどの土井神父さんのお話にもありましたが、病気と言うことで治療がなされていると思います。そして、治療によって、どうかそれなりの健康が維持できている状態。それから、ほんとはみんなと同じように行動するのがしんどい、やっとだという状態の時に、他の方からは「元気なんだ」と思われて、辛い思いをすることがあるということですね。

一つの例をあげます。大変つらい話ですが、障害を持った方々のご夫婦があって、奥さんに対してホームヘルプサービスが提供されていました。ご主人は腎臓の病気で透析を一日おきに受けているという方なんです。いろんなことがあって、「ホームヘルプサービスの見直し、一部打ち切り」ということが出てきたんです。ところが、それでは生活が成り立ちません。ご主人がもっと育児に参加すれば人の手を借りなくて済むという判断が働いたということなんです。ご主人は「やっと」という状況だったんですが、ヘルパーを派遣する側の人にはご主人の辛さが見えなかったのです。いろいろやり取りの結果、理解が足りなかったということで、なんとかうまく解決することができました。

さて、反対に、体調がうんと良くてみんなと同じように行動したい、「今日はできるぞ」という時に、今度は「無理しないでください」・「無理しないでいいから」というふうに言われて、残念に思うことがあるわけです。これは大変身勝手なことだと思うんですが、そういう状態をご存じであるならば、「今日は体調いかがですか」というふうに見かねて、「今日はみんなと同じようにやれるくらいにいい調子なんだ」というふうに見かねて、その時の状態を受け入れてほしいなというふうに見かねて、当然本人もありのままを伝えるべきだと思うんですが、それが難しいときがあるということだと思います。

いろいろ先ほどからお話が出ていますけれども、私の言葉で言う「目に見えない障害」を持つ人への援助の際にも、その人の必要としていること、ニーズを確かめてほしいと思います。これは、先ほ

どの話の中で、意志を確かめることが大切だと言われているのと同じではないかな、と思います。

知的障害・精神障害

一般社会の偏見

次に、精神に障害を持つ人、あるいは知的障害を持つ人に関係したことです。精神障害や知的障害でうまくコミュニケーションのとれない方がこのミサに来られたらどうするでしょうか。今回のこの文書『障害の重荷をともに担える日をめざして』には、そのようなことは余り触れられていないと思います。後で資料として配布されると思いますが、アメリカでは1978年に司教団から『障害にある人々とともに秘跡を捧げるための指針』というものが出ているということで、私も今回これを勉強して驚いたわけです。

さて、特に精神障害者との関わりの中でということでお話いたしますと、精神分裂病などの精神障害の場合には、病状に関わらず「変な人だ」とか「危険なんだ」というようなことで、厄介者扱いをしてしまうことが多いのではないのでしょうか。

ちょっと余談ですけど、反対に、「あなたは精神病なんかじゃないわよ」とか「薬なんか飲むことないよ、神さまが守ってくださるから」とか言って、患者さんが適正な医療を受ける機会を阻んでしまう、そういうキリスト教信者に会ったこともあります。

残念ながら一般社会の精神病患者への偏見や差別はまだまだ大変強いものがあります。今そういった方々の社会復帰施設の設置ということに関わっております。ご存じだと思いますけれども、「迷惑施設」という言葉が現にあるわけです。この言葉に関連してなんですけれども、私もびっくりしたんですが、ある地域に知的障害の方々の施設を作ろうとして、反対にあった時のことです。地元への説得の話の中で、精神障害の方を例にとってだと思えますけれども、「頭の変な人たちの施設じゃない。そういうんのじゃなく、知的障害の施設だから」ということがあったと聞いて、何ともやりきれない思いをしたわけです。

また、地域でいろいろ困っている人々、弱い立場の人々へのお世話をする方々がおりますけれども、そういった方々の中にも役所に来られて、「〇丁目のどこにこういう人がいて、うんと困っているから、どっかへ連れていってくれ」というような相談を持ちかけられることがあります。なかなかむずかしいなと思っております。

内なる偏見

ところが、こういった偏見・差別というのは、実は家族といいますか、身内の中にすらあるんだということです。たくさんの人々と接してきましたけれども、内なる偏見というのはあるな、と感じます。そして、これは、実は私自身の問題でもあったということです。義理の姉が精神分裂病で、もう20年も身近にいるわけですが、正直言って、適当にあしらうというか、嫌なところばかり見えてしまうということがあるかと思うと、また、逆に、そこにも見えない存在といいますか、見ない、視覚停止しているような状況、そんなことがずっと続いていたな、と思います。それが、ここ1、2年でしょうか、最近自分の心の中に悪魔がいるなってとてもやり切れない気持ちがしており

ます。姉の人生とは一体何なんだろうかと、ということが最近気になってきていて、そうしているうちに自分から、声を掛けるようになったといいますか、掛けられるようになった。そのきっかけは一体何だったかは、分からないんです。でも、そうするといろんなコミュニケーションが少しずつ成立するようになってきたように思います。何がしたいのか、何がしてあげられるのかが少しずつですけれども考えられるようになってきたな、ということを感じています。

報道と偏見

精神障害を持った方々で回復した人たちあるいは症状の安定した人たちの中には、患者クラブなどを結成してですね、そういった方々が地域で安心して暮らせるように自ら取り組んでいるグループがたくさんあります。そういった方々とお話をしていると、「ときどき非常に残念に思うことがある」と。「それは何ですか」と言ったら、最近もありましたけれども、傷害事件が起きたりした時の報道の際に、『……なお、この容疑者は通院していた』と。それを聞くと、自分たちはもう大丈夫だけれども傷ついている人々がいるんじゃないかなと思ひ、非常に心が痛むというようなお話をなさっています。

いろいろ述べました。身近な問題でないと、こういった問題の理解はむずかしいと思うんですけども、そのような人がいるということをもっと知ってほしいと思います。そして、機会があれば近づいてほしいというようなことを感じました。

兄弟姉妹の思い

最近目を通していたある知的障害者施設の資料の中に作文が載ってました。心に残ったので紹介させていただきます。

おとうさんおかあさんが、おじいちゃんおばあちゃんになったら、
おにいちゃんはどうなるんだろう。

いちおうわたしといもうとがふたりでおせわするつもりだけれども、
てにおえないだろうな。

だけど、なるべくおにいちゃんをだいじにしよう。

おにいちゃんをだれかがけいべつなんかしたら、ゆるさないから。

だって、おにいちゃんにもたのしくいきるけんりがあるんだから。

以上です。

4 質疑応答

(1) 郡山教会の尾形です。

ちょっとお聞きしたいんですけども。清水さんでもいいんです。

「声を掛けてください」ということは非常に大切なことだと思います。そしてまた、一人の青年が

手を組んで見ていたということも、考えようによれば、どういうふうに話しかければよいか分からなかったのではないかと。また話しかけてもですね、断られた場合の重荷を考えますとね、その青年が黙っていた気持ちが分かってくるんです。ですから障害者の方に言いたいことは、上手な断り方を、それからまた健常者に言いたいことは、断られる方も気持ちよく断られる、なんと云いますかね、断られるのも気持ちよく認めることですね。そして、さっき園部さんもおっしゃいましたように、ニードですね、どのようなニードがこの障害者にあるのか、どんなふうに助けてもらいたいのか、ということをやはりきちんと見極めるならば、この障害者に対してどんな呼びかけをやったらその障害者のためになるのかな、と考えちゃうんじゃないかと思うんですよ。というのはね、障害者というのは、やはり助けてもらうよりも、自分で自立したいんだ、自分で歩きたいんだ、私も時々手引きの会に出ますけれども、「なるべく手を引かないでください」と、そして「危ないところだけ指図してください」と言われるんですね。この点をよく考えまして、断られる方もきちんと断られて感じを悪くしない、また断り方も相手に対して失礼にならない断り方をした方がいいんじゃないかと思うんです。以上です。

(2) 岩手の四ツ家教会の遠藤と云います。

今日初めてこういう会に出席しまして、いろいろなみなさんの意見等を聞かせていただいて、いろいろ思い当たることがあるんですが。と云いますのは、岩手でも四ツ家教会では、こういう障害の問題と取り組もうという動きが出てまいりまして、昨年土井神父様に来ていただいて、お話など承ったわけなんです、私らの中で今一番問題になっておりますのは、先ほど園部さんが話されました「見えない障害」ですね。「見える障害」というのは、いろいろお互いいろんな面がありながらも「見える」ということで、「まあなんとかしよう」、あるいは、「なんとかしてもらいたい」というそんな気持ちの通じ合いもあり、なんとかできるんですが、「見えない障害」特に病気で体が不自由な場合、それとまあ先ほどのお話でも出ました精神障害・知的障害の場合には、若干見えながら見えないようです。そうなりますと、表現の問題もあるんですが、変な憶測ばかりさきに走って正しく見てもらえない。かといって、自分から正しく話す勇気もない。こういう場合にどのように取り組んでいったらいいのか。私らの教会の中にもそういう方が何人かいらっしゃいまして、身近な問題として考えさせられるケースが多いもんですから、こういう場に出ささせていただき、今言ったようなことについて考えていきたいと思っておりますので、何か催し物とかありましたら、連絡いただいて、一緒に勉強させていただきたいなと考えております。

<園部>たぶん適切な答えにはならないかもしれませんが、自分の家庭の中では先ほど話しましたようなことであつたわけですが、やはり同じような人でも外で会うと、また違う部分があるのかもしれませんが。なんでしょ、たとえばみんなが一定の話し合いをしているとかいう時に乱れてしまふとか、あるいは表現がどうなのか分からないんですけども、気ままな発言をするとか、そういうことがあるかもしれないのだけれども、やはり「今はこれ違うよ」という話はすべきと思うんですね。腫れ物に触るようにしているのはよくはないんじゃないかと思うんですね。で、あとはあんまり構い過ぎないで、「今日はどうなの」とか「これどう思うの」とかいうのは、全く同じように話し合いしていけばいいんだと思うし、あとは自然にするのが一番いいんじゃないかなという感じがします

ね。構えてしまって、「何かしなければいけないのかな」と思うのが一番よくないのかなという気がしてきております。

(3) ここに広島大会の紹介がありましたが省略させていただきました。

(4) 秋田教会の加藤でございます。よろしく願いいたします。

うちの教会でカトリック新聞を読んでいて、今日のこのセミナーを知っている人がいたようなんですが、私も実は視覚の障害を持ってしまして、テープでカトリック新聞を聞くようなこともできるようなんですけれども、他にもたくさん読まなくちゃいけないものがありまして、そこまで手が回らなくて、情報がなかなか入らなかったんですね。

お話しさせていただきたいこと沢山ありまして、冊子の中の大きな項目の「四 障害のある兄弟姉妹の皆さんへ」の中の小さな見出しに「1 皆さんの声を聞かせてください」という項目があります。その中で「どうか、皆さんが日々背負い、感じておられることを、声を大にして叫んでください」というふうに書かれてございます。先ほど福島の清水さんもおっしゃっておられましたけれども、具体的には、例えば、就職のことですか、お話ししたいことが沢山あるんですが、時間も限られてますし、また、他の方もいろいろお話をさりたいと思いますので、キャッシュ・デスペンサー、キャッシュカードでお金を引き出す機械ですね、あのことで、実は私、一昨年私どもの視覚障害者協会の仙北地区というところに住んでおりまして、その地区の総会でもって、こんなことを申したことがあるんです。

キャッシュ・デスペンサーの機械ですけれども、今ほとんどが、全部じゃないです、ほとんどがタッチパネル方式といたしまして、画面に触って暗証番号やら金額やらを押す方式になってきています。これですと、はっきり申しまして、私ども視覚に障害のある者は操作できません。で、銀行に伺いました。古い機械ですとほとんどがプッシュ式（プッシュホンみたいな感じで、電卓みたいな方式）でになっていたのを、機械を新しくするに連れて、このタッチパネル式というものに替えられてきているのだそうです。で、ちょっとこれだと私どもが大変不便ですので、ということ銀行の人に申し上げましたところ、「はあ、そうなんですか。私どもそんなことを全然考えていませんでした」という率直なお答えをいただきました。で、そのことを私どもの視覚障害者協会の総会で話したところ、「使えないのなら、使えなくていいんじゃないか」という実に率直な意見をいただきました。でも、やはり、これも先ほど清水さんも話されておりましたが、いつも確かに誰かの手をお借りできる状態であればいいのですが、私どもがどうしても一人でなければならない場合というのもあるわけで、その時にキャッシュ・デスペンサーの機械一つとっても、自分で操作できることに越したことはないんじゃないか、というふうに感じました。

あと時間もありませんので、これぐらいにしておきます。このことを含めて清水さんのお話をお聞かせ願えればと存じます。ありがとうございました。

<清水>いい答になるかどうか分かりませんが、この問題では私たちのいわき市の農協ですね、これはやっぱり非常に困って、農協単位で何とかしてほしいということで、ずっと以前から、これをなんというんですか、これを触らないで、手を触れるだけで変わっちゃうんです。あれではとっても我々にはできないから何とかしてくれと。郵便局とか、それから銀行あたりに電話をいたしました

た。「主旨は分かりました。しかし、先ほどおっしゃったように、時代とともに機械も変わってまいりますので、それを含めて何とかしたいと思います」という、いわゆる建前論にですね、終わったんですよ。で、本音はそうじゃないんです。本音は「そんな視覚障害者の話なんか、第二第三の問題なんだ」というふうに、我々は取ったんですよ、その時に。でも、これは大切なことです。これはやっぱり盲人だけでなく、そういうことで今困っているんだということをですね、今日ここで皆さんに訴えて、そしてそれをお聞きいただいて、何らかの形でですね、やはりこういう点で皆さんなりにバックアップしていただければ、解決も速いのではないかなというふうに考えます。日常生活の中で、やはり視覚障害者はこういうボタン式なら問題ないんですけども、触ると同時に全然数字が変わるとかね、触ると同時に云々ということになりますと、触ったというよりも手を触れないでかざすんですかね、そうすると変わっちゃうんです。これには全く視覚障害者は問題にならない。全盲には問題にならないんだということを敢えて今お話し申し上げて、みなさんにご理解していただき、またかつ、この問題ではちょうど今日東京の橋本館長が見えられておられますが、橋本館長は、昔いろいろこういった問題では「全視協」の第一線に立って活躍した方ですので、何かこういった問題を含めて、お話があるだろうと期待しております。以上でございます。

(5) 石巻教会の倉本と申します。

「目に見えない障害」ということをお聞きしまして、非常なショックを受けました。今まで私はそのことにできるだけ触れないことがいたわりかなと思って、自分勝手に思い込んでいましたけれども、今日のお話を伺って、視点を変えることができました。本当にありがとうございました。

(6) 北仙台教会の佐野と申します。

先ほどの園部様の最後におっしゃいました、知的障害者を持つ兄弟の方の作文というものは、私にはとても身につまされます。私には23歳になるてんかんと知的障害と肢体不自由と持つ娘がおります。その娘は今ベートル病院という全国でも初めてのてんかん専門病院、私立の病院にお世話になっております。その娘の将来を思いますと、私の場合は兄弟にその子を託することは考えておりません。それでご存じかどうか分かりませんが、ジャン・バニエさんがおつくりになった「ラルシュ共同体」というのが世界にありまして、日本では静岡の「かなの家」がラルシュ共同体の第一号として認められましたが、そういう共同体が東北の地に、できれば仙台にあれば、私は子供をぜひそこで、その子も幸せに生きる権利があるわけですから、そういう中で将来生きていければと考えております。でも、体力のある時には自分でそれを何とかしてできたらと思っておりましたけれども、だんだん子供と生活を共にしていくうちに、やっぱり体力も落ちていきますし、ちょっと疲れてきました。それで、ベートル病院というところで今グループホームを作る計画があります。やはりてんかんをもった子は特別なものですから、単なる知的障害のようなケアだけでは足りないわけです。やっぱりてんかんを見た方でないといけないので、それでそのグループホームに期待しておりますが、やはり夢としては、カトリックのジャン・バニエさんがおっしゃっているような、ほんとに愛に包まれた雰囲気の中で生活させられたらと、今夢とともに、私もやっぱりここで頑張って疲れたからと言ってられないのかなと、今そういう思いでおります。

(7) 福島県小名浜教会の遠藤と申します。

現在いわき市にあります障害者の自立生活センター関係の仕事をしております。

今日の大会に参加しまして、まず最初感じたことは、今司教様が説教の中で言われましたけれども、「担える日をめざして。なんの今更」とおっしゃいました。私も全く同感です。聖書の教えはもう2000年前から始まったのに、2000年経って「今からめざして」という言葉は、私も非常に抵抗を感じました。まあ、これから頑張っていこうという意味もあるでしょうけれども。

それぞれ今日のお話を聞いていまして、土井神父様は、神父様の立場で、聖書の言葉、ヨハネ福音書の言葉を取り上げて障害者の問題をお話ししてくださいました。

その中の清水さんと私は古いつきあいです。清水さんは話の中で「按摩さん」という言葉を盛んに言いましたけれども、清水さんはとんでもない仕事をしているような方なんですね。全盲ですが、そろばん塾の先生なんです。日本で二人しかおりません。そういう非常にユニークな方で、清水さんと活動していまして、福祉ということを私は大変勉強させていただきました。

次に、柵枝さん、車椅子ですね。私の家内も、亡くなりましたけれども、難病のために30年間看病して亡くなりましたからよく分かります。そして、お話しする中で、上から見下されると言う話ですね。同じ視点で話してくださいということは、まったくその通りなんですよ。どうしても福祉というものは、してあげるという、上から見た感じが非常に強いんですね。そうであってはならないはずですよ。例えば英語で、よく福祉の先生方が、理解するためには同じ視点でものを見てください、と言いますが、それでも足りないと思います。理解という英語は、アンダースタンドというんですね、もっと自分を低くなるということなんですよ。下に立つというはずですよ。ですから、実は私も家内を看病していて失敗したんですね。病院に最後に4年間寝たきりで入院しましたが、時々屋上でね、景色を見るんですけどもね、私は立っていますから、「ああ、あれが教会だ。あれが家の方だ」と言っても返事をしないんですね。なんでだと思ってしゃがんだんです。そしたら彼女には見えないんですよ。やっぱり自分の立場で見ちゃうんですね。

それから、介護とか福祉、介助というようなことについて、いろいろ問題がでていますが、やはり私はその人よりももっと低くならなければ見えない、ということですよ。で、そこから教わることじゃないでしょうか。例えば聖書の中で、私、強く感じることは、教会の集まりで方々に行きますけれども、いつの間にか聖書がなくなっちゃうんですね。そして、あくまでも個人の話をしている。聖書を開いてね、一番最初に目に付くのは、バプテスマのヨハネの「悔い改めよ」という言葉ですよ。イエスさまも「悔い改めなさい。」ペトロも「悔い改めて、立ち返りなさい」と言っていますね。神父様の前でこんなことをいうのはあれですけども、これはギリシャ語でメタノイアですね。「立場を変えて物事を見る」ということのはずです。悔い改めるということはずですよ、イエスさまの立場に立って変えて考えてみたらどうでしょうか。イエスさまはいつも低くしゃがんで、病気のものにひざまずき、障害者の前でひざまずき、そして手を触れているはずですよ。

私は、常に高い所からかわいそうだという、清水さんもおっしゃったように、哀れみと同情という言葉ですね、それに反発して、今、全国で活動が始まったのが、「障害者の自立支援センター」です。福島県に五つできましたけれども、私も去年つくりました。全国に65できました。これは全国大会でもやりますけれども、あくまで障害者自身が声を出し、それを我々が受け止めて実行に移して

いこうという活動です。そんなふうに変わってきているんですね。どうしても今までは福祉は、かわいそうだから、障害者に「してあげる、してもらおう」という関係だったと思うんです。そうではなく一人の人間としてですね、これは人権ではなく、人格の尊厳だと思っんです。神さまから同じ命を与えられた者としてですね、こうして、特に今、そこの次長が来ていますけれども、「あなたがたはどうしてもらいたいのかそれを言いなさい。遠慮するな」とね。そして、「やってみましょう」と。ひとりずつ、今精神障害者の人もいるし、知的障害者の人もおります。そして集まって何をしたらいいのか。いわゆるニーズの把握ですね。そして、それを全部できるとはいいませんけれどね、できることからやってみましょうという活動です。そういう中で私は、信者としてですね、教会としてもっと認めてもいいんじゃないかと思うんですね。

神さまは愛であるということが、ヨハネ第一の手紙4章に書いてあります。「神は愛です。……目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することはできません」とはっきり書いてあるんですね。さらにルカ14章にもこうあります。「招かれた者はひとりも来なかった。」招かれた者というのは洗礼を受けた人のはずです。そこで、主人は「こういう人を招きなさい」とはっきり言っていますね。「目の見えない人、手の不自由な人、足の不自由な人、貧しい人を優先的に招いてきなさい」と非常に厳しく言っていますね。それを今の教会は実行していないだけじゃないですか。以上です。

5. 人権福祉委員会秘書・橋本宗明さん

ご紹介いただきました点字図書館館長・人権福祉委員会秘書の橋本です。

沢山申し上げたいことがあります区切って申し上げます。

人権福祉委員会の秘書として申し上げますことは二つです。

(1) このテキストを作るのに6～7年かかっています。それで私どもとしてはそこそこのものができたと思っているわけです。しかしできあがって安心すると、読まなくなってしまう。それではもったいないことなので、このテキストを日本中の教会に普及する仕事を始めました。3人の求める人があれば出かけて行くつもりです。

(2) このテキストについては、いろいろな評価があります。高く評価してくれる人と逆な人と。

この白々しさはなんだとか、知的障害児をもった家族の苦しさが分かるかという声もあります。しかし、日本のカトリック教会が障害者問題に対して現在出せる到達点であるということではあります。

このテキストは歴史的産物ですから、改訂版を出さねばなりません。実践の蓄積が深まれば、それだけ改訂版の出版がはやります。

教会は歴史的な存在ですから、ある種の不十分さをもっており、その不自由さが膨らめば、改訂版が必要になってきます。

このテキストの不十分さを指摘し、改訂版が必要となる状況を作っていくことが大切です。

(3) みなさんの力ある話を聞くことができ、嬉しく思います。これほどのエネルギーは期待してい

ないものでした。

私は新しいこれから3年間の運動課題を作り上げていきたいと思ひます。

タッチパネルの問題をどこに持ち込むのか。カ障連というのは非常に特殊な団体でして、要求を行政にぶつけるという性質がどこまで可能か、正直この15年間の経験の中では見通しはありませんけれども、そういうことをやる可能性もあるし、もっと障害の神学のような内省的部分を膨らましていくのも我々の仕事だと思ひます。カ障連とは非常に幅の広い可能性をもっている団体だと思ひます。これをどういうふう膨らましていくかについてはまさに我々一人一人に関わっていることです。

カ障連の一つのテーマに、「あなたが教会です」という言い方があります。私たちは、とかく教会に対して、聖職者に対して、健常者に対して不満を言うことがあります。しかし、「神の民」という言い方をすれば、私たち自身が教会であるわけですから、教会に対する不満というのは、実はUターンして私たちの所に戻ってくるわけです。だからかくかくしかじかの不満があるとすれば、その不満をなくすために、じゃあ私たちは何を始めるのかということが、自分の側に問われ返してくるという位置関係にあるわけです。その意味で皆で議論して、行動のプログラムを決めて、課題を決めて、新しい更なる一步を踏み出すために9月にぜひお出でいただきたい。寝ないで、一晩ぶっ続けでおしゃべりできればいいなと思ひます。

こういう形でこのテキストのために勉強会をもってくれた仙台教区の方々に、もう一回人権福祉委員会の秘書として、心からお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

6. 祈りと分かち合いの集い・閉会の祈り 小川利秀（石巻教会信徒）

お祈りさせていただきます。

父と子と聖霊の御名によって。アーメン。

今日私たちが分かち合ってきたことが、

『障害の重荷をともに担える日をめざして』という小冊子のもと、

これから、全国、全教会にあまねく行き渡って、

一人一人が障害者に対して関心を持って、

そして、一人一人が障害者と友達になって、

これから教会生活とか、いろんな日常生活の中で

お友達感覚でお付き合いができますように、

あなたの祝福をお願いいたします。

今日集まっていたいただいた方、遠くからお出でくださった方々の

ご帰宅が無事なされますように、

あなたの祝福をお願いいたします。

簡単ではございますが私の祈りといたします。

父と子と聖霊の御名によって。アーメン。

7. 当日のアンケートから

1. 今までの自分の生き方が問われ、偏った、利己的な面に気づかされました。キリスト者として、より円熟した者へと成長できますように、発題者の方々のお話を大切にしていきたいと思えます。土井神父様の偉くなると人を見下げるとのお話、印象的でした。心のどこかに自分を上に置こうとする姿勢を認めません。ありがとうございました。

2. 多くの方々がそれぞれのお立場で協力を惜しまず、努力されていることを感じます。すぐには実現できない難問も数多くあると思いますが、それぞれが皆目指すところがはっきりしている。そのことが必ず解決に導いてくれると思えます。

3. 岩手の四ツ家教会でも、少しずつでも取り組みたいと考えています。特に「見えない障害者」についても注視していきたいと考えています。今後連絡もらえれば幸いです。

4. さまざまな障害を持たれるの方々のご意見を伺い、よい機会に恵まれましたことを感謝いたします。

5. 障害者の立場に立って暮らせたら幸せだと思う。

6. 人間の尊厳という視点に立って考えることが大切だと思いました。

7. 私は障害というのがよく分かりません。はたして何が障害といえるか知りません。しかし、今日分かったことは、とにかくいろんな人が生きてそれぞれ生きていこうとしている姿です。ボランティアもさせていただいていますが、日頃人とのつながりがないためにとっても辛いです。しかし、何か求められていることで、できることをお互いにすれば、これが“通い合う”ということではないかと思えました。

8. 共に歩みたいと願いながらどうしたよいか分からなかったり、勇気がなかったりですが、これからは少しの勇気を持って、自然な交わりをしていけますようにと思えました。ご発題の神父様皆様にとっても励まされました。

9. 「見えない障害」の園部さんの話を聞いて考えさせられました。カトリック宮城県大会とか、いろんな集まりにいかに参加してもらい関わり合うか、これから考えていく必要がある。

10. 健常者以上の努力、思いやり、心構え、ただただ敬服するばかり、学ぶべきことばかり、より以上の努力をお祈りいたします。

11. 直に障害のあるの方々のお話を聞け、とても勉強になりました。とてもすばらしいし、これからも機会があれば参加したいと思います。

12. 各発題者の貴重なお話とても参考になりました。また、橋本館長さんのお話の中の、私たち一人一人が教会だというお言葉に、はっとさせられました。これからの私の生活の中に今日の体験を活かしていきたいと思えます。今日までご準備くださいましたお世話役の皆様、本当にありがとうございました、御苦勞様でした。

13. 今日のお話いろいろありがとうございました。聴くことの大切さ、知ることの大事さを気づかせていただきました。今日のお話を伺っているうち、ふとこの教会（元寺小路）に属している者として、今日のこの会以前の問題なのです。他県から集まれる集会において、トイレの表示、車椅子の

置き場所を考えさせられました。自分の教会だから分かっている知っているのではなくて、初めて来られる方がたを思っていくことだと思いました。障害者の方々を思うとき、大会がある今日のような日だけでなく、常に裏面に（脇の方ではなく）車椅子の用意をされていて、車椅子の姿が見えないのは、誰でも使いたいときに使えないのではないかと、小さな思いですが、気づかせていただきました。今日の講演会本当にありがとうございました。自分の視点を変えていく機会をいただきありがとうございました。

14. 大変参考になりました。

15. 障害者の方々に対する理解が今までより深まったと思います。とても（参加して）よかったと思います。

16. 忙しいといって参加できなかった方に今日のことを伝えたいと思います。言葉で心に残ったことは、「お友達として付き合う」「勇気を持って声を掛けてください」……。最後に、橋本氏によれば、パンフレットが速く改訂できるような、3年間の活動が実りあるものとなるよう協力してほしいとのことでした。いろいろと目を開かせていただきありがとうございました。

17. 今日は土井神父様のお話を聞かせていただきありがとうございました。

18. はじめてこの会に出席させていただきました。神が私に福祉に対する目を開かせてくださるよう祈る心です。なお、この会が単なる集いに終わらないよう実りあるものにしたいと思います。

19. すばらしい集いでした。沢山知りたいです。

20. 日常の中で自分がどう関われるのか非常にむずかしいと思われる。互いに近づくことができるようにむしろ同じ立場で接したい。話を交わすことで互いのよい関わりができるように思います。今日話をしてくださった方、準備をしてくださった方に感謝します。

21. わが家にも身障の姉がおり、もっと優しくすればと反省させられました。ありがとうございました。

22. 適切なお話を感謝します。ただ、エコーが入りよく聞き取れなかったので、今後はエコーのないようにして頂ければ幸甚に存じます。

23. 外の教会に出たことのない信者です。初めてこのような大会に参加させていただきました。本当にありがとうございました。特に「目に見えない障害」のお話を聞いてショックを受けました。そのことに触れないことがいたりだと勝手な解釈をして、遠巻きにしていたものですから。視点を変えてものを考えるいい機会になりました。いい機会を与えていただきありがとうございました。マイクの声がエコーのように響いて言葉が聞き取れませんでした。

24. ①『障害の重荷をともに担える日をめざして』の表題について、「何を今更めざして」という司教様のお言葉に共感いたします。“愛”を告げ知らせその“実践”を目標とするカトリック教会であるなら、どこよりも先にここに目を向けるべき、それが本当だと思います、思いました。「目に見えない障害」も忘れてはならない大きいこと、ある意味では（人格的な意味で）より深刻な問題です。「ホスピス」「設立」と同じ意味でカトリックの“愛”に包まれた障害者の「自立センター」の“設立”を強く望みます。それにはまず、障害者本人とその家族が声を上げなければならないでしょう。

② 力障連のことを、日力連（荒井）・世界力連（浜口美智子）の幹部の方々に理解していただくことも有効な一つの方法ではないでしょうか。

私は孫に重度の障害を持つ身です（癲癇、半身麻痺、知的障害）。

25. すばらしい会でした。障害者の方々の話に感動しました。我々健常者よりあの方々が充実した人生を送っているということがよく分かりました。こういう集いはこれからも行われることが望ましい。

26. 5ヶ月になる初孫が重度脳障害で、何する術もなく、「恐れることはない。主のなせるままに…」と、やっと落ちつきを取り戻しました。障害のある皆様に力づけられ、私たちにも仲間がいることに生きる望みを得ました。よろしく願い申し上げますとともに、皆様に主の平安がありますように、お祈り申し上げます。

27. 感動の一日でした。反省しております。今日のこの出会いを活かすことができますよう私に与えられたことで勇気を持って努めてまいります。

28. 時間が少なかったようで、今後はもっと時間をとってほしい。

29. （後日参加者から寄せられた感想です。）

私たちは、不思議なおん恵みによって、司教手話ミサに間に合いまして、司教様のありがたい説教をやっと聞くことができまして、「あとのスケジュールが長く思われますので、この辺で終わりといたしましょう」と司教様、皆大笑いをいたしました。…… 終わりました、交流会で午後2時を過ぎてから昼食になり、当教会の司祭（出身者）のW神父様は、お茶とお菓子をすべての人に何度もついでくださり、K氏は「神父様のお茶は葡萄酒になるのではないですか」と申され、笑いました。神父様は「気をつけてお帰りくださいね」と私たちを励ましてくださり、おかげさまで無事帰宅して安心し感謝をいたしました。

30. （これも後日参加者から寄せられた感想です。）

キリストの へいわ

せんし〃つは たいへん おせわに なり、ありが〃とう
こ〃さ〃いしました。ほうそう た〃いか〃く(つうしん
きょういく)の レポートていしゅつに てまと〃って
しまい、おたよりするのか〃 おそく になりました。
かさねか〃 さねに なりますか〃、おこえか〃 けを
いたた〃き、ほんとに よい へ〃んきょうに になりました。
ことに、4にんの かたか〃たの ねつの こもった
たいけん はっぴ〃ょうは、わたしの こんこ〃の
たいへん よい さんこうに になりました。それと、なんと
いっても、こ〃ミサの せっきょうにて、「いまさら

しょうか“いの おもにを とともに になえる ひを
”めさ“して”なんて・・・”と いう しきょうさまからの
おことは”て”、カトリックきょうかいが” かかえて
いる け”んし”つを、わたしたち しょうか“いしやは
もちろんの こと、きょうかい せ”んた”いて” すなおに
かつ、けんきよに うけとめて ゆかねは” ならないと
あらためて おしえを こうた きか” いたしました。
あと、おしまれるへ”くは、たいけん はっひ”ょうこ”の
とうき”の し”かんか” もうすこし あれば”
それそ”れか” いま かかえて いる なやみとか
きょうかいの かかわりかたに ついて もっと もっと
おおくの かたか”たの こ”いけんか” うかが”えたのに
と いう ことて”す。わたしが” A カトリック
きょうかいて” せんれいを いたた”いてから ことして”
7ねんめに はいりましたか”、A に かき”って
いうならば”、きょうかいの ないか”い とわす”
しょうか“いの ある ひと、ない ひととか” とともに
あゆむ、ともに いきる と いえる いきには いまいち
たっして おらす”、いまた”に と”こか しょうか“いを
もつ ものに たいして、と”こか へいさてき、ほうけん
てきな ふんいきを のこしつつも、おたか”いか”
と”うやって せ”して よいのか とまと”いなか”らの
てさく”りし”ようたいに あるよな きか” して
なりません。て”すから、しょうか“いしやの ”しやかい
さんか”と いう てんて”は、A は また”また”
とし”ように あると おもわれます。たとえば”、ふた”ん
の せいかつて” こまった こと しかり、しこ”どの
こと しかり、けっこんの こと しかり、とにかく
いま われわれ しょうか“いしやか” おかれて いる
け”んし”つと、それに たいして と”う たちむかって

いくのかを そっちよくに かつは° つな かたちで”
うかが”って、こんご”の さんこうに させて
いたた”きたかったと、し”ゃっかん ころろのこりて”す。
そんな なかで”、わたしの うしろの さ”せきに
すわって おられた ひとりの た”んせいから、「なんの
かんのと いても、ここで” ああた” こうた”と
いいあったって はし”まらない。しんふ”んか なにかに
どうしよするしか ないた”ろ。めの みえない やつの
しゅうしよくく”ちなんて ないんた”し、あんまの
めんぎよ とつたら かいぎ”ようするより ないんた”よ」
と いう げ”んし”つて”は ある もの、いささか
さみしい つふ”やきか” きかれ、「そう いう こと
で”は こうして し”かんを さいて セミナーを
ひらいて どうき”する ひつようも なくなって
しまう」と おもって しまったと と”うし”に
げ”んし”つは げ”んし”つとして うけとめねは”
ならないと しても、やはり ひとり ひとりか”
もっと こえを た”いに して、しゃかいに いろんな
ことを うったえて いかないと、ほんとの いみて”
”しょうか”いの おもにを とともに になえる ひ”を
めさ”す ことなんて えいえんに て”きないのて”は
ないかと いう ふあんかんすら わいて まいりました。
さきにも のへ”た ことと し”ゅうふくいたしますか”
とにも かくにも、わたし し”しん、とりあえず”

A きょうかいに つと”う ひとの なかに
と”れほど”の しょうか”いを もつ ひとか” いる
ものかか” つかめない こと、そして、しょうか”いしやと
しさいも ふくめて、しょうか”いを もたない ひとたち
との せっしかたに さいし、また” とまと”いか”
あると いうのか” いつわらさ”る し”し”つて”す。

かくして、こんごも このような つと"いか" あれは"
し"かんの ゆるす かぎ"り、さんかして、ます"は
わたしの しんこう せいかつ、しゃかいせいかつの
よき かつりよくと して まいりたいと おもって
おりますので"、と"うか ご"めんと"うて"も、また
なにかの おりに おこえか"けいたた"ければ" さいわい
に そ"んし"ます。そして、わたしご"ときて" なにか
おやくに たてる ことか" ありましたら、と"うそ"
おもうしつけいたた"ければ"、よろこんで" おてつた"い
させて くだ"さいませ。と"うそ" こんご"とも
よろしく おねが"いいいたします。

あおやまさん はし"め、かしょうれん せんた"いしふ"の
スタッフの みなさん、しきょうさま はし"め もとて"ら
こうし" きょうかいの みなさまか"たの、ますますの
ご"けんこう、ご"けんしょうか" かみさまの うえに
やくそくされますことを おいのりし、ひとます"
しつれいいいたします。なか"なか"と らんふ"んの
かす"かす" なにとそ" おゆるしくた"さい。

1997ねん 6か"つ 12にち

A きょうかい アントニオ マリア カトウ ソウコ。

あとがき

今年6月に行われました「仙台司教区『障害の重荷をともに担える日をめざして』祈りと分かち合いの集い」の報告集をお届けいたします。

この報告集を手にし、「集い」の底に流れているものを感じ取っていただければ幸いです。

約1年の準備期間、そして当日と実に多くのことを学び、多くのことに気づかされました。

障害のある側・ない側というとらえ方ではなく、お互いに「キリストのからだ」のかけがえのない肢体＝メンバーであるとの視点（信仰）から現実をとらえ直し、歩み続けることの大切さなどなど……。

これからも私たち一人一人の課題として、と同時に教会全体の課題として継続的に取り組んでいきたいと思えます。

発題いただいた方々をはじめ、この集いのために惜しみない協力をしていただいた方々、そして、この報告集発行のためにお手伝いいただいた方々に、心から御礼申し上げます。

(この報告集をお読みになったの、ご意見・ご感想をお寄せください。)

1997年9月15日

編集発行

仙台司教区人権福祉委員会

カトリック仙台司教区本部事務局内

〒980 仙台青葉区本町1-2-12

TEL 022-222-7371、FAX 022-222-7378

神の業が
この人に
現れるためである。

ヨハネ 9・3